
April・Foolな発言

K I D

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

April・Foolな発言

【Nコード】

N1317S

【作者名】

KID

【あらすじ】

大切な俺とアイツの邂逅の日を前に、アイツから電話が掛かってきた。『名探偵・・・俺、死にたくなつた・・・』。4月1日ギリギリで投稿しました！！今度の新作小説の前に出す短編を、ちよつと早めにアップします！一日目はコナン、二日目はキッド目線です。気になった方は読んでみてください！

(前書き)

- 一 目目はコナン目線。
- 二 目目はキッド目線です。

「ハア・・・ ハア・・・ ハア・・・」
少々荒い息遣いの中、俺は一人、雨の中を走っていた。
傘もささず、レインコートも着ぬまま・・・。

本来なら、こんな日に外になんか出るはずがない。

雨は少々痛いくらいの土砂降りだし、おまけにこの時期だから風も寒い。

更に時刻は、もうじき11時半になろうとしている。

昼の11時半ではない。

真夜中の11時半だ。

事の発端は数十分前。

そろそろ寝ようと布団に潜ったところで、いきなりアイツに電話で呼び出され、俺は蘭やおっちゃん達が寝ているのを確認してから、そそくさと出掛けた。

今は一人で、目的地でもある杯戸シティービルを目指して走っている。

全く・・・。

こんな日に車ではなく、足だけで外に出ているのは俺だけだ。

まあその前に、車以外で外に出ている人の姿なんて、何処にもないのだが・・・。

本当にこんな土砂降りの中、一人でここまで走らせる根源をつくったアイツを、今すぐにも蹴り飛ばしてやりたい……。

殴り倒してやりたい……。

そう思う半面で、どうしようもない不安もあった。

それは、その電話が掛かってきた数十分前に遡る。
布団に潜ってすぐ鳴りだした携帯電話に、俺は『誰だよ』と半分イラついたまま、画面を開いた。

まあ大抵、こんな時間に電話を掛けてくる相手は、蘭が大阪にいる服部。

または解毒剤制作中の灰原だったのだが、この時はその3人からではなく、何故か『非通知』の文字が画面に出ていたのだ。

当然すぐに電話に出たわけではなかったのだけれど、いつまで経っても鳴りつ放しだったので、渋々携帯には出た。

電話に出た時に聞こえてきたのは、激しい雨音と誰かの息遣いのみ……。

「もしもし？」

『……………』

「誰だ？ 間違い電話かぁー？」

『……………』

最初は本当にそれだけで『出ないんなら切るぞ？』と俺が言うと、向こう側の相手の息が『ハッ……』と言ったのを感じた。

その微妙な声と気配で、何となく誰からの電話なのか見当が付き、それで尋ねたのだ。

「もしかして……キッドか？」

『……』

「キッド……だろ？ ……そうだよな？」

俺が何度かそう尋ねてみると、アイツは小さな声で答えた。

『うん……。そうだよ、名探偵……』

「お前……。なんで俺の携帯番号を……!!」

『前に、大阪の探偵君の携帯を見た時に、電話番号が載ってたんだ……』

「それで掛けてきたのか……。んで？ 今日はどうした？ まさか、俺に捕まえてほしくなったのか？ 今日はお前の現場に行つてねえけど……」

『そう言えば、今日はキッドの犯行予定日だったよな』と思いつながらそう尋ねてみると、何故か微妙に声が聞こえなくなってドキリとした。

『まさか本当に捕まえてほしくなったんじゃない……』と、嘘だとは思いつつもそう思ってしまう。

「おい？ ……どうした？」

『……』

その後はしばらく無言の状態が続いて、流石の俺もおかしいと思つた時、アイツが突然こう言い出したのだ。

『名探偵……』

「……ん？」

『……俺……』

死にたくなつた……。

その後は今の俺の行動で分かっているように、慌ててアイツに今いる場所を訊いて、急いで向かっているというわけだ。

何せアイツの口から『死にたい』という言葉が出てきたのは初めてのこと……。

怪盗キッドとしてもう1年以上動いているアイツが、あそこまで思いつめるような事態に陥つたのは初めてだ。

今更泥棒としての罪悪感に襲われたわけではないだろうが、下手をすると本当にマズイ事をやりかねない……。

何せアイツは今、杯戸シティービルの屋上にいるのだ。
しかも今日は大雨。

あのハンググライダーを雨の中で開いてみる。
雨水の重みで即落下すること、ほぼ間違いなし。
そればかりか、確実に死ぬ為にハンググライダーですら広げないかもしれない……。

嫌な予感だけが過る中、ようやく杯戸シティービルに到着した俺は、大急ぎで階段を駆け上がった。
本当にエレベーターが使えないのが痛い……。

100段に近い階段を駆け上った俺は、屋上へと通じる扉の前で、一回息を整える。

幸いにも屋上の鍵は開いていた。

まさかアイツが開けたのだろうか……。

そんな事を思いながら、俺は一気にドアノブを捻り、ドアを開ける。

「キツドツッ!」

そこで見たアイツは、一人土砂降りの雨の中、立っていた。

キツドの衣装のまま……。

俺の携帯に掛けてきたものであろう、携帯電話を右手に握りしめたまま……。

身体全身が雨に濡れ、そして何故か所々に赤いモノが、衣装の前の方に付着している。

血痕だった。

見た感じアイツのものではなさそうだが、その量と言い、色と言い、何らかの事件に巻き込まれたとしか言いようがない。

少なからず、アイツの身に何かあったんだ……。

そういつもの直感で感じた。

「キツド……! お前……」

「……来てくれたんだ……。こんな雨だから、来ないと思っただ……」

「ばっ……、バーロオー!! 来ないわけねえだろ!? あんな

電話よこしてきて……」

「ハハ……。そうだよな……」

そう言つて笑うアイツの顔は、笑つてなどいなかった。
生氣すら見えてこない。

いつもの余裕綽綽で気障な怪盗は、俺の目の前にはいなかった……。

「とりあえず……、階段のところ行こうぜ？ これ以上濡れたらマズイだろ？」

「でもこの血……、俺のじゃ……」

「分かつてる！ だけどここで話すよりは、……雨音がしない扉の向こう方がいいだろ？ ここじゃあ、お互いの声もよく聞こえない……。お前今すげえ、声ちいせえし……」

本当はこれ以上コイツの身体を雨に濡らしたくはなかったのだが、素直にそう言つたところで、今のコイツが中に入ってくれるとは思えなかった。

だからあえて他の理由で、コイツを階段の方へ引つ張つたのである。

濡れた袖を引つ張つてやると、キッドは素直にゆつくりと、階段の方へ歩きだした。

そのまま俺も一緒に、ゆつくりとドアの向こうへ進む。

中に入ってドアを閉めてみれば、あれほど五月蠅かった雨音が一切聞こえてこない。

これでようやく静かな空間になった。

とりあえず俺とキッドは、階段の一段目にそつと腰を下ろし、お互いにお互いの顔を見ぬまま、しばし沈黙状態になった。

『今日はどうしたんだ？』と俺が訊かない限り、向こうは一切答えてくれないのだと分かつてはいたのだが、どうにもどういうタイミングで尋ねればいいのか分からず、無言の状態で言葉を探す。

するとアイツは、横目でそんな俺のことを悟ったのか、小さく口を開いた。

「人……、傷つけたんだ……」

「！……なんですか？」

「……」

「……おい？ 理由話さねえと、意味ねえだろ？」

「……うん……」

きつと言いくいことなのだろうとは思ったが、このままではどうすることも出来ない。

もっとハッキリとした事情が訊きたい……。

コイツは元々、人を傷つけるような……。

犯罪者として向いているような人間なんかじゃないのだ……。

「……キッド？」

「……馬鹿にされたんだ」

「誰を？ お前のことか？」

そう尋ねてみれば、キッドは首を横に振った。

「俺が尊敬してる奇術師^{マジシャン}……。お前、知ってるだろ？」

「ああ……。黒羽盗一って人だろ？ 前に蘭が言ってたぜ？」

奇術愛好家連盟の時に、お前がそう話してた』って」

「うん、その人……」

つまり馬鹿にされて、思わず手を掛けてしまったと……。

しかしたったそれだけのことで、そんな返り血を浴びるほどまでやるだろうか。

それに、それで傷つけた拳句『死にたい』って……。

「ちょっと度を越し過ぎじゃねえのか？ 人を傷つけたことにしろ……、自殺願望しちまったことにしろ……。」

「^{マジシャン}奇術師はみんな馬鹿ばかりだ。いつも自分の限界までやって、最終的に自分自身を傷つけるか殺してる……。一回誰かがやって死んでしまえば、普通2度もそんなものはやらないはずなのに、魔^マ術師^{ジシヤン}というものは止めやしない……。」

「ん？ おい……。」

「あの黒羽盗一だつてそうだ。脱出マジックなんて基本的に死ぬ奴が大勢いるっていうのに、決まってやりだすんだから……。結局のところ、モテたいだけだろ？」

「おい！ お前何言つてんだよ！！！」

「……だからキレたんだ……。キレて傷つけた……。」

「……。」
「どうやら今キッドが言ったものは、そのキッドが傷つけた相手の発言だったらしい。」

確かに……。

これは少々酷い……。

「それほどコイツが黒羽盗一のファンなのにもよるが、確かにこれは少し酷過ぎる。」

「少なくとも、俺の大好きなシャーロック・ホームズがそんな風に言われたら……。」

「うん、何かしらやっていそうだ。」

「確かに……、ちょっと酷えな……。んで？ 傷つけたって、どんな風に？ まさかトランプ銃でどっかの脈切ったりなんかして」

えよな？」

「・・・その方がマシだったかもしれない・・・」

「・・・えっ！？ お前何したんだよ！ 一体！」

そう問い掛けてみれば、またしても無言になってしまった。

相当思いつめているようだが、ここで俺は『まさか』とは思いつつ、一番最悪な結果を尋ねてみる。

「まさか・・・、殺したりはしてえんだろ？ まさかなあ！

お前『傷つけた』としか言ってるねえし・・・」

「・・・」

「えっ・・・？ ・・・冗談だろ？」

「・・・」

「なあ・・・なんで黙ってたんだよ・・・」

「・・・」

「おい・・・。嘘だろ？ キッド!？」

「分からないっ!! ・・・死んじまったかもしねえんだ・・・。

下手したら・・・」

そう言っ頭を抱え込んだまま睨り泣くキッドに、俺は『嘘だろ』
と思いながら、とりあえずキッドの肩に手を掛ける。

今キッドの中には、途轍もない恐怖が襲っているのだろう。

確かにこんな奴なら『死にたい』と言ったことも分らない。

「おい、キッド。頼む、もう泣くな。えっつと・・・、その・・・。

こついう時はその・・・、最悪な状況のことなんか考えんな。な？

俺がんなこと訊いたのが悪かった！ それは謝るから！ な？

そのことはもう考えんな。・・・えつと、それで？ その悪口言っ
たヤツに、何したんだ？」

「・・・『何した?』って・・・。お前なら分かるんじゃないの？」

その……。俺のこの血の飛び散り方見て……」

そう言っただけの血の付いている部分を見せたキッドに、俺は口籠った。

少々ドス黒い血痕……。

それは固まっただけからではなく、元々の色が黒っぽい赤のせいだ。

血が飛び跳ねているのは、キッドの胸から襟の部分まで。

本当は顔にも掛かっただろうが、おそらくあの雨で落ちたのだろう。血痕の飛び散り方から言っただけ、飛沫血痕なのは一目で分かる。

ただ気になったのは、その血痕の形……。

何処にも伸びている血痕がないということは、血痕は真正面から飛んできたに違いない。

それらのところから考えられるやり方と言っただけ……。

「殴ったのか……？ それも位置的に正面から……」

「……うん……」

「後ろ？ それとも前？」

「後ろ……。多分そのまま相手は倒れたから……。俺の顔は見えないと思う。でも、あの場所に居たの俺だけだったから……。見当は付いてるかも……」

「後頭部か……。ちよつと微妙だなあ……。殴った物は？」

問題はそれだ。

その殴った物によって、相手がどうなってしまったのかが決まってくる。

特にブロンズ像や金属バットなどは、打ちどころが悪ければ一発だ。

まさかそんな物では殴つてなどいないと思うが、とりあえず尋ねてみる。

すると返ってきた答えは、まさかの道具だった。

「……………今回の獲物……………」

「『獲物』つて……………！！ あのダイヤのステッキかつ！？」

実は今回の獲物は、昔のイギリス人貴族が使用していたと思われる、持ち手のところに大きなダイヤが嵌め込まれたステッキ。つまり、杖だったのだ。

慌てて俺が尋ねてみると、キッドは小さく頷いた。

ちなみに殴つた方は、最悪なことにダイヤが付いている方だとのこと。

「なっ、何回！？」

「一回だけに決まってるだろ！……………ただ……………、手加減してない……………」

「……………そうか……………」

「……………やっぱり……………、死んじまったかなあ？……………」

「うーん……………。ちよっと道具はマズイけど、ブロンズ像とかよりは死ににくいと思うぜ？」

「でも！ 一発でアイツ……………」

「単なる脳震盪かもしれないねえだろ？ 悪い方には考えんな……………」

まあ、そりゃあコイツには刺激が強過ぎただろうなと思いつつ、俺はこれ以上不安にならぬように笑みを含ませながら言った。
ところで訊きそびれていることが、まだ一つ残っている。

「それで？ 肝心の殴った相手は誰？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・中森警部の部下の部下の部下・・・・・・・・」

「つまり・・・・・・・・、下っ端の警官って・・・・・・・・、お前、警官に手え出したのか!？」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・。どうしても許せなくて・・・・・・・・。だってあの人は・・・・・・・・!！」

「？・・・・・・・・『あの人は』？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでもない・・・・・・・・」

何となく俺は今、ここでコイツが何を言おうとしたのか、分かった気がした。

今のキッドは、8年前の怪盗キッドじゃない・・・・・・・・。

父さんの時のキッドじゃない・・・・・・・・。

きっと別人なのだ。

俺達と同じ年くらいの・・・・・・・・。

もしもこの推理が当たっていたら、きっとこのキッドは二台目・・・・・・・・。

一代目はこの世にはもう存在していない・・・・・・・・。

その一代目と思われるキッドが姿を消したのは、8年前だ。

黒羽盗一が事故で死んだのと、同じ年・・・・・・・・。

同じ時期・・・・・・・・。

だから予測がついてた。

あえてこの場では言わないけれど・・・・・・・・。

(言える立場じゃねえ・・・・・・・・、か・・・・・・・・)

俺は静かに胸中でそう呟いて、そつと階段から立ち上がった。
その反応に、キッドは目をパチクリさせている。

「明日。ちよつとおつちゃん用の事で中森警部のところに行くんだ。
その時に訊いてみるよ。その馬鹿警官の安否……」

「えっ……？」

「勿論、お前だって馬鹿の類に入ってたんだぜ？ 人様の暴言で手を
掛けたことはな。でも……、そのことはかなり責任感じてんだろ
？」

「……うん……」

「なら、俺はこれ以上は何も言わない。さあ！ もう帰ろうぜ？

雨がちよつとばかり小雨になったみたいだし……。風邪ひくぞ？」

「……それは……、名探偵もでしょ？」

そう言うキッドの顔は、いつもの月下の奇術師の顔のキッドだった。
ここにきてようやく、安堵の表情を見ることが出来た。
相当不安だったのだろう。

心なしか俺自身も、ホッと胸を撫で下ろしていた。

その帰り道、キッドは溜息を吐きながらボソツと呟く。

「それにしても……。邂逅記念日のジャストタイムが、俺の傷害
事件話になっちまうとは……。ごめんな、名探偵……」

「謝るんだったら、俺をそんな時間に連れ出したことを謝ってくれ。
……。本当は明日、お前に会うつもりだったんだぜ？ 丁度一年目
になるから……。なあ？ 今日の出来事も『April・Fool
』でしたあー！』って言ってくれよ」

「……それが出来たらいいのにな……」

「……まあ……、もしその警官が生きてて、軽い怪我程度で済

んでたら、何でもいいからお前の出来ることで詫びっとけよ？
いな？」

「分かってるよ。．．．そこまで一方的な人間じゃない」

「だよな。ああーっ！！ 眠い！！！」

こうして二人は、それぞれの分かれ道で別れた。

その翌日。

というよりも22時間後．．．。

屋上でキッドとまたしても顔を合わせる事になった。
というより、待ち合わせていたのだが．．．。

「よお、名探偵！ 早いじゃんか」

「ああ。昨日に引き続きつてな」

ここまでは今まででも交わしてそんな会話だったのだが、ここでキッドは恐る恐る、昨日の警官の事を尋ねた。

「そう言えば、名探偵．．．。その．．．、あの警官．．．。どう
だった？」

「ん？ ああ．．．。あの駄目警官のことか？」

「だっ．．．、駄目警官？」

「ああ。あの警官なら、全く昨日の事反省してなくて、普通にお前
が悪いって言ってピンシヤンしてたから、強で3回くらい蹴り飛ば
したけど？」

えっ．．．？

今なんだって．．．？

「えっ？ 『強』つてまさか．．．！ あの殺人シューズで！？」
「ああ」

「勿論ボールだよな！？ サッカーボール！！」

「んにゃ．．．。ボウリングの玉。中森警部が最近ハマってて持ってきてたやつ．．．。」

そう言えば．．．、中森警部前にんのこと．．．。

えっ．．．？

マジかよ、それー！

「！！．．．．．あつ．．．．！ そっか！ そうだよな！」

「ん？ 何笑つてんだよ？」

「April・Foolだろ？ それ！ ハッハッハッハッ！！
まんまと引つ掛かるところだったぜ！」

「．．．キッド」

「ん？」

「あの時計台の時計、見てみる．．．。」

そう言われて振り返った俺の目に、信じられない光景が飛び込んできた。

青子との思い出のある時計台．．．。

その時計台の文字盤に刻み込まれた、今の時刻．．．。

「12時．．．、14分．．．。」

「さあ、キッド！ 今俺の言ったことは、April・Fool本当のことかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317s/>

April・Foolな発言

2011年4月23日19時04分発行